

辨
門 9
號 4374
卷 1



七夕の説

此の俗は天の河の東に
織女ありて織機を事とせりて
その宿す織機を河の西に牽牛星とせりて
あひてそのち歡を食飲の事とせりて
さぬ升をとりて織機を織るの事と
なりて天帝無き河の東に宿りて只一

昭和二十九年
二月四日
辨

一なるありし宛ふりてあんかやうれゆらるるもあ
桂陽城のたふ中次なるあをりしりや記らん
はち我國より行きしハ天正統寶七年七月
公事根源より入付続として正安六年七月
文人より七夕の待夜賦をむと續り紀
志路より進しその年数乃ありしそのりし比叙
富士河原のお切ちるをりしし海軍に軍持物志

と記すもその様はあからずきなりとの天河志
かゝる事なりて事ある織女ありしり時を
いつても句をりしる君平よりしりし記したの
けり妻へ語りし八百のりしりし七月七を記し
と新皇合記と記しりしりしりしりしりしり
あもせよと記しりしりしりしりしりしりしり
記すしりしりしりしりしりしりしりしりしりしり

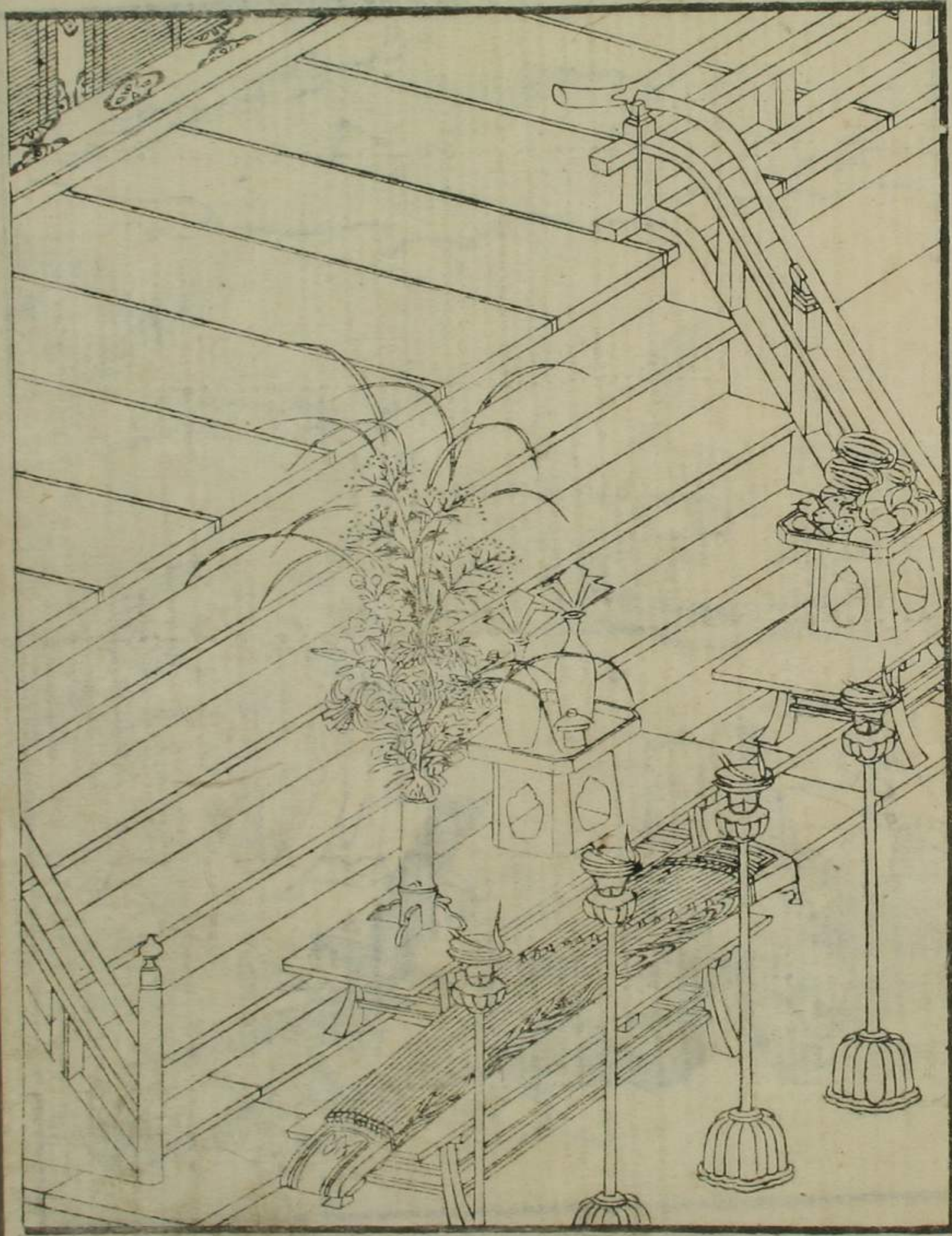
事の生れはちをぬたのひししき無きまゝの地ハ
すれをよるよるまは文の津れの初歌に詠るも
こ那職姫のよとひりこ橋上船の由昔を方
あさこことこぬあしてこの時夜の新老をこりこる
はまかろくしし水奈よりけ刻限ハ八ぞは抄り
いちちさくしはれやこる我やまの呼もれん
くわさくししはねとよこるぬあふししの

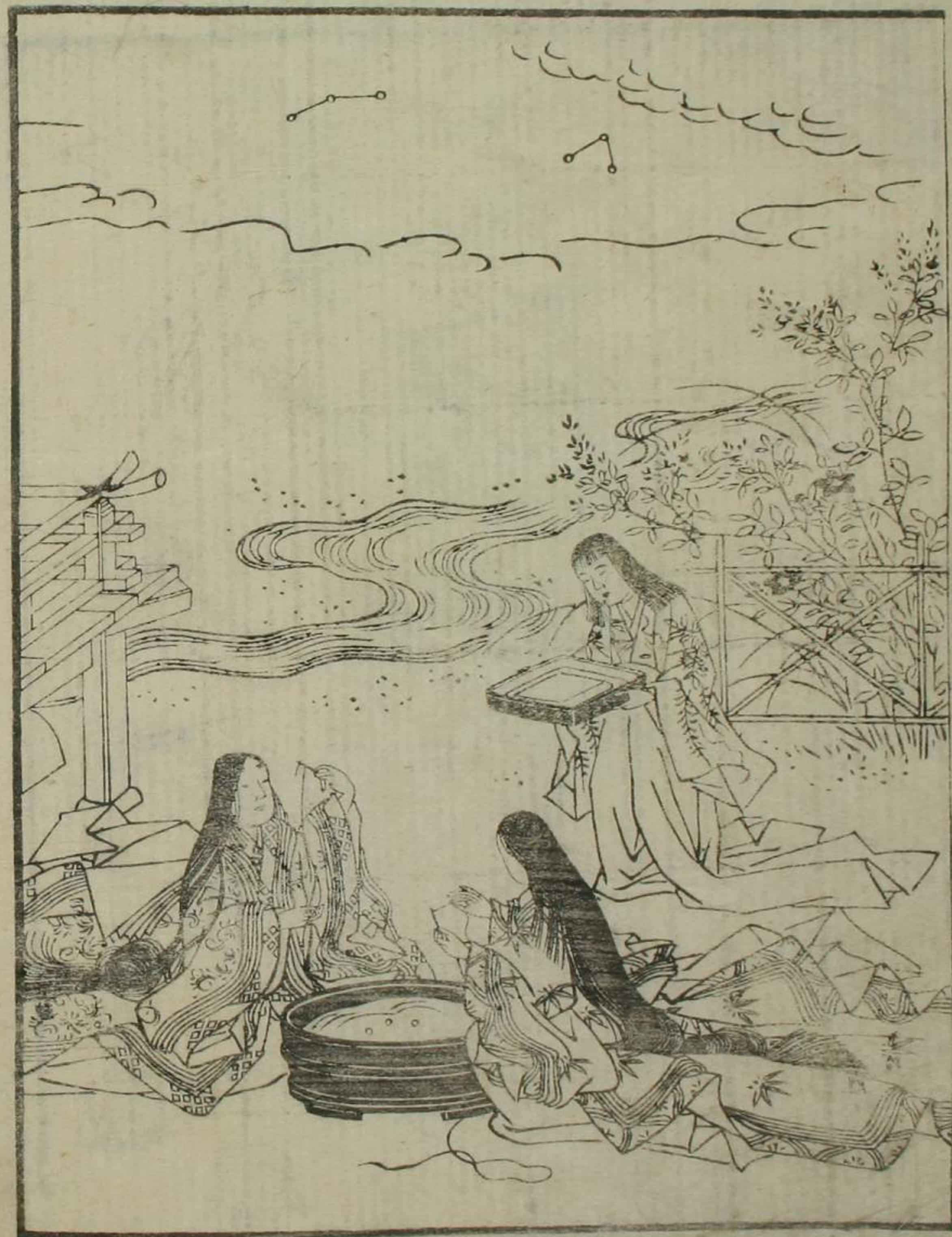
ね歌乃てよく音も音とけよ上天の由事
玉移世心とりり少のちみこる海風のそりけ
うちそゆし

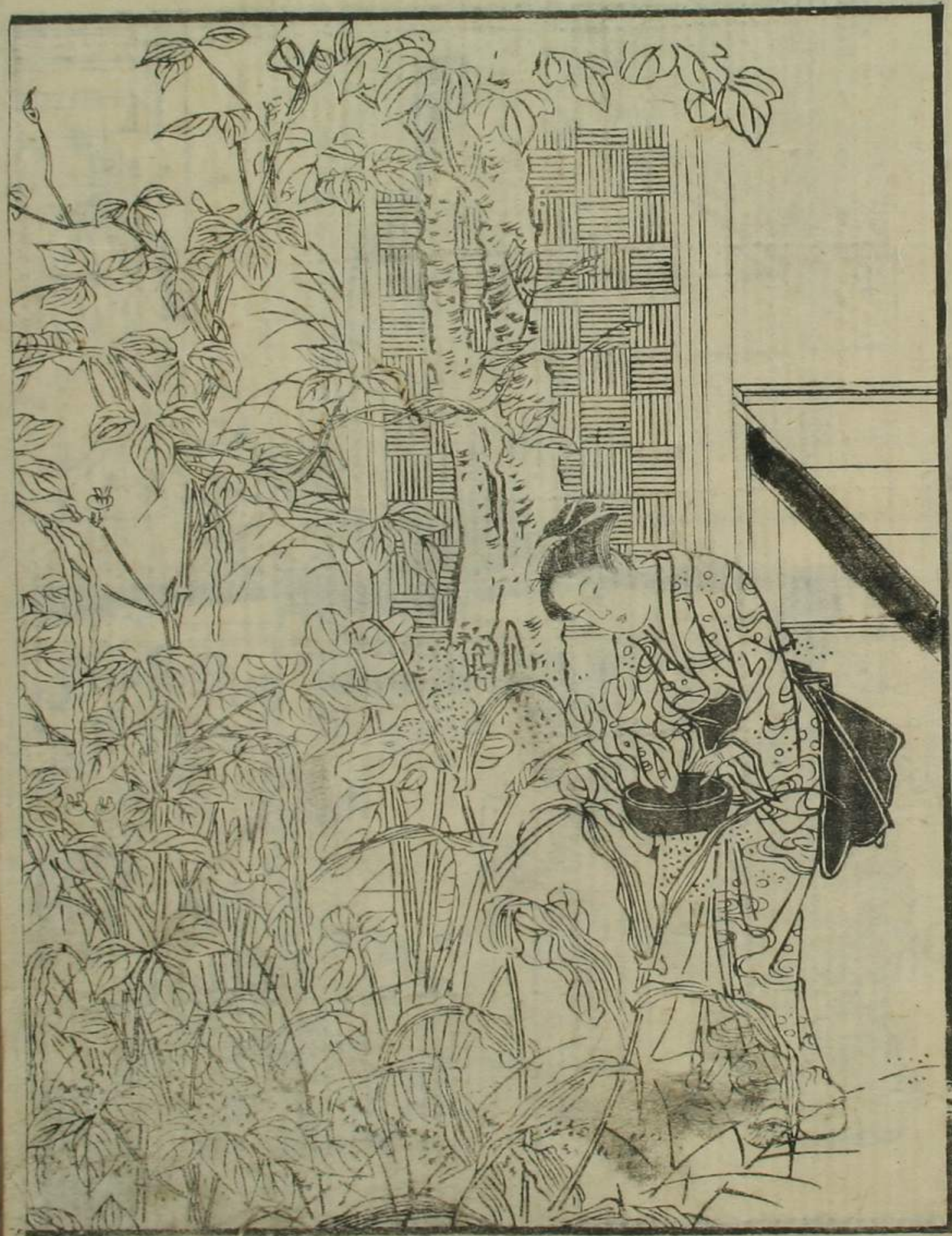
宿屋飯成四

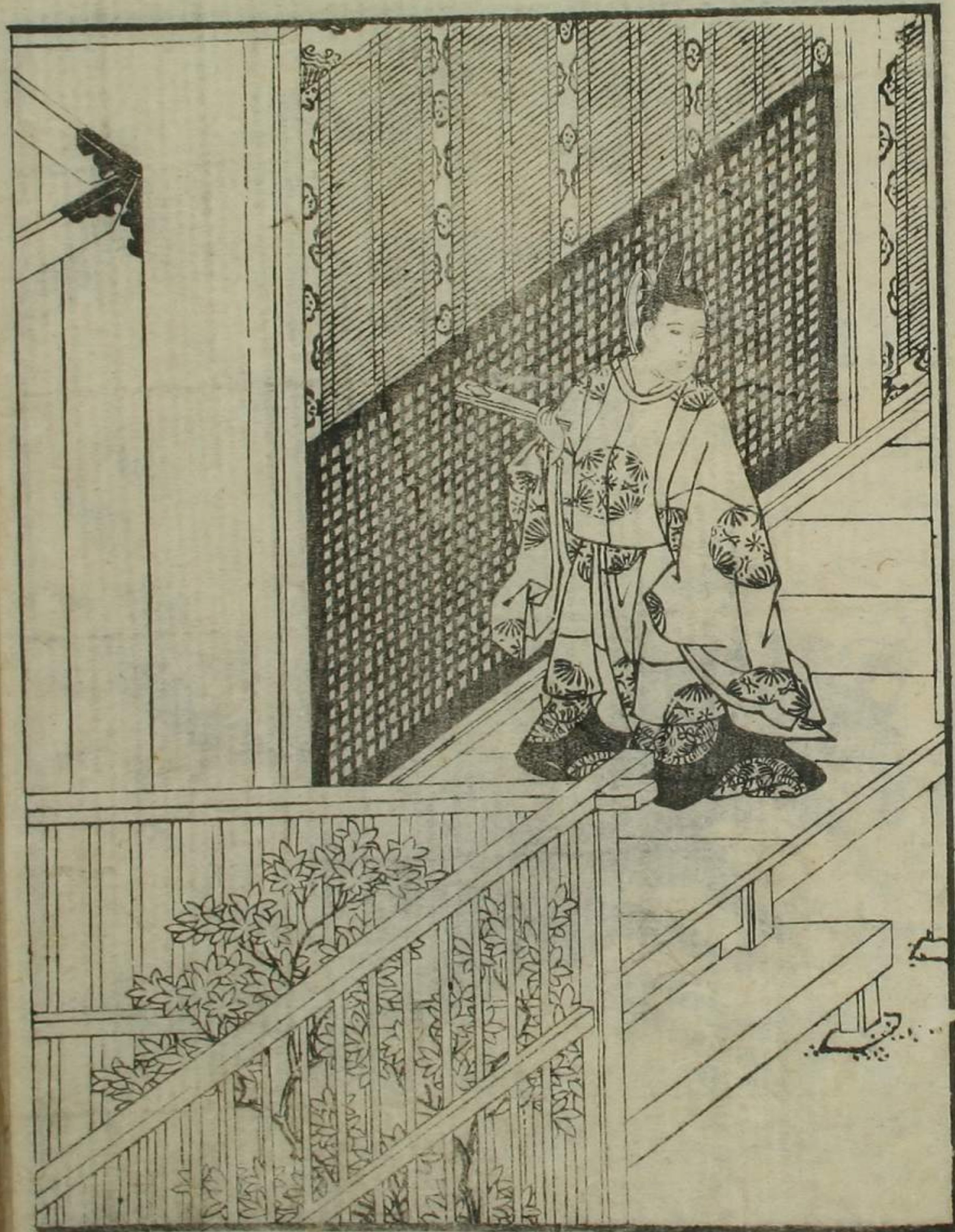
庚戌七月七日











上
下



尾陽

芦を因鶴丸

積よりも押さへて七夕の恋のそせり天れ川子

花を遠洲

むしより今よりなむ七夕の年よあふおも律義一色ん

演まハ砂

舟出でて今より早れ妻送一いろつく天の川へつこあ

子賀うらめ

ゆらぐハ隔一川返七夕の恋の心かく埋てやう

夏永全集

西風よとささめく中やうらめしくハ隔つ早の契り

混音九改

壁中古文

七夕のときさるおのき侍ひまうりて下桂の一葉返ん

源平祝

きりの目おこくも定るこ早えんじくしや翁る櫓

師能土師九

年よつ交早ぬあふ染の波しおうーよりあふ染今形

扇折風

光陰の矢われららと母とあふりの的はさるねぬ早今のを

海士綱曳

七夕ハ今宵あふるあつ河て定交夜ハ九之とくん

七夕加一

紀わく女

七夕子何故うなも惜りしましくいのちまきくふのうと

紀安磨

定りてあつりあるあのみ今ハ白のうらみあつてあま

菖松織

あつの川よる流るる人涙る流る早も花こあまれ川なみ

塔川人あ

七夕のまれ川流るのちせんとおももほむりくまのくねと

高坂時成

一とあまらう一あつのうまらう七夕つあまらう今とる

右馬耳風

母火より花火のあけて多向より早や紅葉の橋とらん

紀和奇女

あつくりも七夕つめれお琴よまてうしからん今宵あひる

楓 呼 徒

むれ出く今宵ハ半も七夕の初らひの糸や鼻通らん

一外 事 橋

仮名士のいろは紅葉の橋うけおるそとあれおらん

茶 埜 玉 浦

あつくりも早はるるは流るるよそそけをまれ天の川

